

---

彷徨い人

天野節子



幻冬舎文庫



彷徨  
い人

目次

プロ  
ロ  
ー  
グ

失  
踪

家  
族

不  
審

疑  
問

仮  
説

6

11

55

71

111

155

解説	エピソード	遺書	湖水	日記	談合	検証	憎悪
服部宏							
425	418	395	365	321	279	225	199

## プロローグ

検察官 「被告人は、この凶器で被害者を殴打、死に至らしめた」と供述しているが、それは事実ですか」

被告人 「事実です」

検察官 「どのように殴打したのですか」

被告人 「後ろから殴打しました」

検察官 「被告人と被害者の身長を考慮すると、被告人が被害者の頭部を殴打し、死に至らしめるには力学的に無理があると思うが、被告人と被害者はどのような位置関係にあったのですか」

被告人 「座り込んでいるような姿勢をしていました」

検察官 「誰がですか」

被告人 「――被害者です」

検察官 「ということは、被告人が高い位置から、被害者の頭部へ凶器を振り下ろした。こ

のような状況ですか」

被告人「そうです」

検察官「それなのに、凶器に被告人の指紋が付着していないのはなぜですか」

被告人「分かりません」

検察官「この凶器には被害者の血痕<sup>けつこん</sup>、被害者の毛髪、それと、被告人以外の指紋が付着している。被告人は、凶器の指紋を拭き取りましたか」

被告人「拭き取りません」

検察官「先に述べたように、凶器から、被告人の指紋は検出されず、他の人物の指紋のみが検出されました。これは、被告人の供述と矛盾するが、それについてどう思いますか」

被告人「分かりません」

検察官「何がどう分からないのか、具体的に説明してください」

被告人「私の指紋が消えていたことも、他の人物の指紋が付いていたことも、なぜなのか分からないということです」

検察官「凶器の保存状態は極めてよく、両手十本の指紋が克明に付着しています。さらに、血痕や毛髪はそのまま、他の箇所は綺麗に拭<sup>ぬぐ</sup>った痕跡がある。つまり、指紋の

人物は、被告人の指紋を拭き取り、そのあと、故意に自分の指紋を付着させた。そのような考えられますが、どうですか」

弁護人「異議あり！ 検察官は、えんきまよく婉曲に自白確認の誘導をしています」

検察官「そうは思いません。被告人は、すでに、自白しています。今の質問は、被告人の自白内容と凶器の状況に矛盾があるため、それをただ糺すための質問であって、自白の確認ではありません」

裁判官「検察官の質問の趣旨を認めます。質問を続けてください」

検察官「被告人は殺害を認めています。だが、もつとも重要な物的証拠である凶器の状況が、被告人の自白と一致しません。凶器に、被告人の指紋がなく、他の人物の指紋が付着している。考えられることは、指紋の人物が被告人の犯行をいんべい隠蔽し、自分の犯行であるかのように凶器に手を加えた。このように思うのが妥当です。被告人はどう思いますか」

弁護人「異議あり！ 憶測のみの誘導尋問です」

検察官「誘導ではありません。凶器の指紋についての審理は、極めて重要です。被告人は供述すべきと判断します」

裁判官「被告人は、検察官の質問に答えてください」



被告人「どうしてそうなったのか分かりませんが、答えようがありません。私は自分の  
犯行を認めています。これ以上、何も言うことはありません」

検察官「質問を変えます。被告人は被害者の頭に凶器を打ち下ろしたあと、どうしました  
か」

被告人「覚えていません。打ち下ろした直後に意識が遠のきました」

検察官「凶器がなくなっていたことに気づいたのはいつですか」

被告人「覚えていません」

検察官「被告人は、凶器が指紋の人物の自宅にあったことを知っていますか」

被告人「知っています。刑事さんから聞きました」

検察官「ということは、指紋の人物は、被告人の犯行を隠蔽するために凶器を自宅へ持ち  
帰り、自分が罪を負うときのことを想定して偽装工作进行了。このように推測さ  
れるが、どうですか？」

弁護人「異議あり！ 今、被告人が殺害を犯したかどうかを審理しています。検察官の  
質問は本件から著しく逸脱し、被告人を混乱させます」

裁判官「異議を認めます。検察官は質問の内容を変えてください」

検察官「質問を終わります」



失踪

ナースセンターには誰もいなかった。

カウンターに、訪問者が名前を記入する用紙が置かれている。

二〇一一年六月十九日。上部の欄外にそうあった。その下に野線の引かれた枠があり、二十行ほどがさまざま名前前で埋まっていた。

患者名、折原幸子。来院者名、折原宗太。患者との関係、息子。

「折原さん、こんにちは」

宗太が振り返ると、介護士の田中聡子さとしこがにこしながら近づいてくる。小柄で小太りの体に水色の制服が似合っている。ゴム手袋をした手に青いバケツを持っていた。宗太が会釈しながら聡子に近づき、二人は並んで廊下を歩いた。

「お母さん、幸せだわ。一週間に二回。定期便なもの」

「いつも母がお世話になっています」

いいえ、と聡子が首を振り、小声で言った。

「預けっぱなしで、ほとんど来ない家族、結構多いのよ。費用を払うときだけ仕方なく来る

けど、そんなときだって、ちよこつと病室を覗いて、終わり。覗きもしないで帰っちゃう人だっているわ」

宗太は黙って笑った。この話は他の介護士からも聞いたことがある。

医療と福祉の設備を整えた清香病院には数十人の介護士がいるようだ。どの人も感じがいいが、なかでも田中聡子は親しみやすい。母の幸子も一番信頼しているらしく、聡子の姿を見ると、麻衣ちゃん、麻衣ちゃんと連呼した。幸子は、田中聡子を麻衣ちゃんと呼ぶ。麻衣は子どもの頃死んだ、宗太の妹の名だった。他にも幸子がときどき口にする名が数人あるが、そこに宗太の家族は出てこない。

「昨夜はどうでしたか。徘徊のほう」

「私は当直ではなかったから、分からないけど、そんな話は聞いてないわね」

宗太は頷いた。

その部屋は六人部屋だった。普通の病院と違って廊下側の壁は、腰辺りから上がガラス張りになっている。そういう部屋が廊下に沿っていくつも並んでいる。

どの患者も、正常な判断力を失っているから思いがけない行動をとる。目が行き届くように、危険を防止するために、という理由で、そのような構造になっていた。患者側にすれば

窓際のベッドに幸子がちょこんと座っていた。

今日も鱔革わにがわの大きなハンドバッグを膝にのせている。宗太が独身だった頃、幸子の誕生日にプレゼントしたものだ。幸子はそのバッグが大好きで、常に身近に置き、人が触るとひどく怒った。

財布や貴重品は入っていない。入っているのは、四つ折りにした数枚のティッシュペーパー、トイレットペーパーの芯しん、ヤクルトの小さな空のボトル、包装紙の切れ端、空の菓子袋などである。幸子はこれらを、病室内のゴミ箱あきを漁あさって集める。

入り口に顔を向け、宗太を見ているのに、幸子はなんの反応も示さない。距離があると認識度が希薄だった。そばに行き、手を握り、声をかけ、顔をじっと見つめると、宗太だと分かる。とたんにしゃべりだす。その内容のほとんどが介護士の悪口だった。悪口を言いつつ、介護士がそばを通るといきなり呼び止め、こまごまとした礼の言葉を並べ立てた。

そんな幸子が、ごくまれに、はつきりした意思を感じさせ、宗太の来訪を感謝することがある。ときには涙を浮かべることもあった。そのたびに、以前の幸子に戻ったのかと驚くのだが、五分もしないうちに同室の患者を指さして、あの人が意地悪をすると、言いつけるのだった。

幸子は小学生が履くような白い上履きを履き、紺のズボンに薄茶のブラウス、小豆色あずきのカーディガンを羽織っていた。自分で着たのだろう。ブラウスのボタンがずれている。以前の幸子ならこんなチグハグな着方はしない。お洒落しゃれでセンスのある人だった。

宗太は椅子いすを引き寄せて幸子の前に座った。

手も握らないうちに幸子がじっと宗太を見つめた。

眉根を寄せ、瞬きもしないで見ている。穴のあくほどとはこのことだろう。こんな表情を見たのは初めてのような気がする。なぜこんな目をするのか。この暗くて深い眸ひとみは、目の前の息子から何を感じ取っているのだろう。

ほんの十数秒なのに、幸子の眼差まなざしに疲労し、額に汗が滲むのが分かった。宗太は息苦しくなり、視線をはずした。

「……宗太」

ハッとして幸子を見た。幸子は宗太を見つめながら、もう一度、宗太、と言った。いつもの声だった。

「——今日はすぐ分かったね。母さんは優秀だ」

「——ハンコ」

宗太は思わず笑って幸子の手を取った。いつもの決まりだった。宗太が幸子の掌てのひらへハンコ

を押す真似をする。よくできましたというしるしなのだ。宗太がこぶしを掌に押しつけると、幸子がニツと笑った。

宗太が子どもの頃、幸子はときどき優秀という言葉を使って宗太を褒めた。今思えば、幸子はその言葉を使うのは、宗太が自分で考え、自分の言葉で表現したり、自分のアイディアで何かを作ったときだった。

今でも覚えていることがある。幸子と道を歩いているとき、くもの巣を見つけた。宗太はくもの糸を指先で触った。そのときの感触を、『ねばねばしている』と言った。幸子は嬉しうれそうな声で褒めた。『宗太はいい言葉を知ってるのね。優秀だ』と。幼稚園の頃だったと思う。

別のある日、麻衣の入院している病院で、幸子と麻衣と宗太の三人で、切り紙細工をして遊んでいた。突然幸子が画用紙を一枚ひらひらさせ、『この画用紙を、このテーブルに立てたいんだけど、宗太だったらどうする？』と聞いた。

宗太は画用紙をそのままテーブルに立てた。当然立つはずがなく、何度立てても画用紙は力なく倒れた。宗太はしばらく考え、画用紙を丸めて端をセロテープで止め、筒状にして立てた。そのときも幸子は言った。『宗太は優秀だ』と。これも、幼稚園の頃だと思う。学校に入り、テストの成績がいいとき、幸子は、『よかったわね』と言った。



宗太は、『よかったわね』と言われるよりも、『優秀だ』と言われるほうが高級のように思えて嬉しかった。だから、今は宗太が幸子にその言葉を使う。幸子もそう言われると嬉しいような表情をした。

そんなことを回想しながら、幸子の肉の薄い掌をさすったとき、懐かしく、嬉しい思い出が消し飛んだ。

幸子の手首に薄紫の圧迫痕がある。やはり、徘徊が続いているのだ。

夜に徘徊が多発する場合、危険防止のために手首をベッドの柵に結わくことがある。これは一ヶ月ほど前に医師から説明があり、承認を求められた。承認せざるを得なかった。

宗太は切なくなる気持ちを励まし、ふざけた口調で言った。

「折原センセイ、ボタンがずれてますよ」

幸子が胸元を見て、乾いた声でハハと笑った。緩慢な指遣いでボタンを直している。

幸子は中学校の国語の教師だった。六十歳で定年退職し、その後、区の図書館で臨時職員として受付業務に従事した。六十五歳で完全に仕事から離れたが、その二年後に言動がおかしくなった。アルツハイマー型認知症と診断されたのは幸子が六十八歳のとき。症状は徐々に進行し、半年ほど前から、中度と高度の中間に相当する症状が現れ始めた。

清杏病院に入院して一年半が過ぎていく。

「今日は何食べようか」

そう言ったとき、宗太はギョツとして後ろを振り向いた。

隣のベッドの老女が宗太の腕を掴んでいた。半袖のシャツなので宗太の腕はむき出しなのだ。何を考えているのか、老女はしきりに宗太の腕をさすり始めた。もう片方の手に、日本人形を抱いている。

ひと月ほど前から幸子の隣にこの患者は、いつも日本人形を抱いていた。人形はときどき衣装が替わる。今日は赤い振袖かりそでを着ていた。訪問の曜日や時間帯が違うのだろう。宗太はこの患者の家族に会ったことがない。だが、人形の衣装が替わるたびに家族の思いやりをみるようで、宗太の胸は締めつけられた。

その手をそつとはずした。

老女は宗太と目を合わせないままくりと背を向け、両手で人形を抱き締めた。

幸子が、宗太の膝を叩いて、ハンバーグ、と言った。

日曜日の幸子の夕飯は外食。この一年、そう決まっている。病院も許可していた。幸子を車に乗せ、しばらくドライブをする。原っぱで散歩をする。そのあと、ファミリールレストランか、ときには洒落たレストランへ連れていく。宗太は食べない。飲み物だけ注文し、幸子の食事の介助をする。

幸子がそれを喜んでいるかどうか分からない。無表情でいることが多く、美味しいかと聞けば、オイシイと鸚鵡返しおうちがえに言うだけだ。親子の対話が絶えて久しかった。それでも、外へ連れ出すのは、外部の空気に触れ、刺激を与えるため。だが、それよりも、宗太自身、病室にいたことが苦痛だったからだ。

病室に三十分いると、健康な人なら気分が重苦しくなる。聞こえるのは意味不明の言葉と呻き声。怒鳴り声が飛び交うかと思うと、介護士を呼ぶ哀願の声。そこへ断続的に金属音が混じる。患者がベッドの柵を叩くのだ。そこはまったく別世界だった。

幸子は自分で歩くことができる。宗太と一緒にエレベーターにも乗る。

鰐革のバッグをしっかりと抱えた幸子の手を引き、駐車場まで行った。助手席のドアを開けると、幸子は自分から車に乗った。

「母さん、シートベルト、自分でできるよね」

「——シートベルト」

「そう、シートベルトしないと、助手席に乗れないの、知ってるでしょう」

幸子は黙ったまま、前方を見ている。シートベルトをする気はないらしい。そういえば、前回のときもそうだった。そのときは、仕方なく幸子を後部座席に乗せた。宗太はそのこと

20  
を忘れていた。今日も幸子は、すんなり助手席に乗ったからだ。

宗太はベルトを引き出し、幸子の肩から斜めに渡した。

そのとき、いきなり幸子が宗太の手を振りはらい、激しい声で叫んだ。

「イヤー！」

宗太はびっくりして幸子を見た。幸子が睨むにらようにして宗太を見ている。

「どうしたの？ シートベルトするのイヤなの？」

「イヤ！」

「この前も、そう言ったね。どうしてシートベルトがいやなの？」

幸子は宗太を睨んだままだ。

「だったらここには座れないよ。後ろの座席だよ、それでいいの？」

幸子が頷き、バッグを抱えたまま自分で降りようとしている。

前はこうでなかった。宗太がベルトを引き出し、先端の金属部分を持たせると、幸子は自分でバックルに差し込んだ。指先の動きが不安定なので、時間はかかるが、宗太が根気よく励ますと差し込むことができた。そのたびに宗太は、優秀だね、と言って褒めた。

幸子は体の半分を車の外へ出している。足はそのままだから体が前のめりになった。宗太は両腕を幸子の脇の下へ差し込み、車外へ出した。幸子は自分で歩いて後部座席のドアの前